

愛、という名のミサンガ

岡本 悠

木谷は、悶絶した、愛苦しい...

「愛」と、一言で言っても、わからないだろう

洋子は、慣れた手つきで、タバコに火をつけた

「わたしは、弱きに流れやすい...」

目を右、左と、順番に、閉じるのが癖だ

謝肉祭には、人が集まった

ネネはいなかったが

若葉、夢乃、みさえ、などがいた

洋子は人気がある

童顔で

かわいらしい

20代ではあるが、

10代のような顔立ちである

客は「愛」の歌を唄った

洋子は「わたしは、友達が少ないから、こんなに祝ってもらって嬉しい」と、スピーチした

客は「愛をください」と、歌ったが

洋子は、「ごめんなさい」と、おどけた

笑いが起こった

酒をおごった

だから、

帰りは、最後まで、見送ってくれた、嬉しそうだった

木谷は神に言った

「洋子は、かわいいから、愛しちや駄目か？」

神は

「あの子は、弱きに流れやすいから、駄目だ」

と言った

木谷は、洋子に恋をするのは、やめてしまった

お腹のカラスが、カーと鳴いた

俺は、バーで、コーヒーを飲んでいて

若葉や、夢乃と、話をしていて

すると、洋子は、合計4人で、友達を連れてやってきた

女2人、男2人

今日は、洋子は客だった

洋子たちは、着くなり、順番にカラオケを唄った

俺は、洋子にピースサインを送ったが

洋子は、まったく見ていないで、気づかなかった

若葉は言う、

「ゲームのネットで、知り合った仲間みたいよ」

時代を感じた

俺は、それを機に、若葉と意気投合して喋った

また、ある機会には、

洋子は、深く挨拶してくれた

「この前は、ごちそうさまでした」

謝肉祭のことだ

律儀である

男の客は、

洋子は「この人が、この店で働いたら？」と、紹介してくれた

と言った

それまでは、普通のお客さんだったらしい

最後に会ったのは、俺が最後にバーに行った日だ、

夢乃と話していたら、

何も言わず、

背中を通りすぎた

俺は、話しかけようとしたが

夢乃が敬遠したので

そっちに筋を通した

洋子は、バイト代をもらっていた

そして、また、何も言わずに去って行ってしまった

歪ではあるが、至って、普通でもあった

俺は、夢乃と会話を続けた

幼顔に隠された、牙

腕のリングは、ほどけてしまった、愛で...

「完」